

## 子どもの奥深さを

### 再発見

佐々木由美子

二〇一〇年に出版された低・中学年向き作品を改めて読み返してみると、悩みを抱えた主人公が多いのに気づく。世情のせいなのか、それとも幼い子どもを描く視点が深化した証なのか。子どもが幼ければ幼いほど、ついその無邪気さや天真爛漫さに目が行きがちだが、幼い子どもだって悩みや悲しみ、ときには不条理とむかいあっている。友達とうまくいかない、何の理由もなく仲間はずれにされる、自分の思っていることを表現できない、親に理解してもらえない……。しっくりとかみあわない歯車に翻弄され、心を痛めてもがくのは幼い子どもも大人も同じだ。

#### 〈子どもの根っこを支える〉

「かんぱい」シリーズの三冊目『ずるやすみにかんぱい！』

（宮川ひろ作・小泉るみ子絵 童心社 三月）の雄介は、間違っ  
て「前へならえ」をしたことをきっかけに意地悪されはじ  
める。初めはいっしょに自分の間違いを笑っていられた雄  
介も、意地悪なからかいに心がしぼんでいく。『はじめて  
のゆうき』（そうまこうへい作・タムラフキコ絵 小峰書店 九  
月）のとしおは気が弱いところはあるものの、なぜ急に仲  
間はずれにされるようになったのか理由さえわからない。  
しかも、幼稚園の時から、ずっといっしょだった友達まで、  
いっしょになって仲間はずれにしたり、意地悪したりする。  
子どもの世界も、理不尽なことがいっぱいだ。しかし、そ  
んな困難な中であって、雄介やとしおの根っこを支えてく  
れたのは、愛し理解してくれる人の存在だ。たった一人で  
も根っこを支えてくれる人がいれば、立ち向かう勇氣もわ  
いてくる。『ふしぎなのらネコ』（くさのたき作・つじむらあ  
ゆこ絵 金の星社 九月）の主人公・さきを支えてくれたの  
は、タイトル通り不思議な野良ネコだ。思ったことがいえ  
なくてつい手が出てしまうさきは、誰とも仲良く遊べない。  
妹に対してもイライラしてばかり。野良ネコは、妹が生ま  
れて以来、お姉ちゃんとしていろいろなことを我慢してきた  
さきを褒め、ゆっくりでいいから自分の思いをちゃんと言  
葉にするように励ます。それ以来、怒りたい気持ちになる  
と、ネコのことを思い出し、どなったりたいたいたりしない  
で、自分の思いを伝えられるようになるさき。誰かとな